



六 進化 六

誰かを見守るような暖かな太陽の光。ほほを撫でるようにやさしく吹く風。波ひとつなく、水平線まで一直線につらなる穏やかな海。その海の上の天候と呼応するかのよう、海面下でもゆっくりと海水が漂っている。

別れよう。

元に戻ろう。

誰からともなく声上がる。

陸から、空から、海の中に舞い戻った意志の塊と、元々海中にいた意思の塊たちは、自分たちの方向性を決めた。すると、老朽化した高層ビルがダイナマイトなどで爆発されて、崩れていくかのように、あっという間に、細胞分裂を起して、海の中に溶けだした。

そこには、統一された意志の塊はなく、眼には見えないほどの個々の意志が、あてどなく、時には、寄り添い、時には、ぶつかりながら、海の中をただ彷徨するのみであった。